音楽と豊かに関わることができる生徒を育成する音楽科の授業

～音楽の意味や価値を創り出させることを通して～

Ⅰ　主題設定の理由

近年、生成AIの発展により、音楽や美術といった芸術教育の分野においても、専門的な知識や技能をもたなくても、生成AIを活用して瞬時に作品を生成することが可能となった。こうした状況の中、芸術教育の意義や目指すべき方向性について、改めて問い直す必要が生じている。

この点について、東良雅人は「そのプロセスが全くブラックボックス化していて、一体どういう経緯を経て絵が出来上がっているか我々にさっぱり分からないわけです。でも芸術教育の実は重要なところは、そのアウトプットの最後ではなくて、そのプロセスに一体どういう学びがあるかということを明らかにする必要がある」[1)]と指摘している。つまり、芸術教育において重視されるべきは、最終的な成果物そのものではなく、そこに至るまでの過程における学びの質にあるといえる。

芸術教育の学びの意義について、有識者による会議において、「芸術系教科は、問いやテーマ、答えを自分でつくりだしていく学習であり、これから先の不確実な、見通しがなかなかもちにくい社会の中でこそ一層重要となる。また、インターネットやスマートフォン、生成AIなどのテクノロジーが当たり前のように使われる社会となる中、個別性の重視による多様性の包容、多様な価値を認める柔軟な発想や他者との協働、身体を通して知性と感性を融合させながら対象や事象を捉えていくことなど、芸術系教科における学びの意義はより一層高まっている」[2)]と指摘されている。したがって、芸術教育の一領域である音楽科においては、知性と感性[注1)]を基盤とした音楽的な見方・考え方[注2)]を働かせながら、他者との協働的な活動を通して、自分なりの音楽の意味や価値[注3)]を創り出していくことを重視する必要があると考える。

また、スモールは音楽を「musicking（音楽すること）」として捉え、「音楽の本質とその根本的な意味とは、対象、すなわち音楽作品の中にあるのではまったくなく、人々の行為の方にある」[3)]と述べている。つまり、音楽とは、人々が演奏したり、作曲したり、鑑賞したり、他者と共有したりする行為そのものであり、それらの行為を通して生まれる気付きや感情が基となって音楽の意味や価値が創り出されていくものと考えられる。このような音楽観は、教育の場面においても同様であり、生徒自身が、音楽活動を通して音楽の意味や価値を創り出すことに、学びの本質があるといえる。

以上のことから、音楽科で重要なことは、生徒自らが、音楽活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ､他者と協働しながら多様な視点に触れ､音楽の意味や価値を創り出すことであるといえる。そして、最終的な成果物に至る過程において「何を感じ、どのように表現するのか」を試行錯誤しながら音楽の意味や価値を創り出すという音楽の本質に触れる経験が必要であると考える。

学習指導要領においては、「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力の育成」が重視されている。平成20年の学習指導要領改訂においては、生涯にわたり音楽文化に親しむ態度の育成が重視され、現行の指導要領ではさらに一歩踏み込み、音楽文化と主体的に関わり、心豊かな生活を営むための資質・能力の育成が示されている。このように、音楽科では「生活や社会の中で音楽と関わる資質・能力」を重視する方向性が打ち出されている。

しかしながら、「芸術系教科においては、それぞれの見方・考え方を働かせ、生活や社会の中で音や音楽、形や色などと豊かに関わる資質・能力を育成する目標・内容をより改善する必要があるので

はないか」[4] と指摘されているように、必ずしも十分にその力が育成されているとはいえないのが現状である。また、「芸術系教科においては、題材設定に課題が見られることから、中核的な概念や方略を示すことで、学校現場において『本質的な問い』の理解が深まり、学習指導要領の趣旨を踏まえた指導の充実につながるのではないか」[5] と指摘されている。したがって、題材設定においては、中核となる概念や方略[注4] を示し、音楽的な見方・考え方を働かせ、学びの意味や生活・社会とのつながりをより明確にすることによって、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わることができる生徒の育成が図られると考える。

前研究シリーズでは、「音楽の意味や価値を創造する生徒の育成」を研究主題として実践を行ってきた。その結果から、音楽的な見方・考え方を働かせながら、「個別最適な学び」[注5] と「協働的な学び」[注6] を充実させることにより、音楽表現に必要な知識・技能を身に付け、「表現のめあて」[注7] を自ら決定できるようになった。また、題材ごとに設定する音楽を形づくっている要素を見直し、課題に即した「工夫ポイント」[注9] を提示したことにより、学びの文脈にのって深い学び[注8] に到達できたことが成果として挙げられる。

その一方で、学習で得たことが題材の枠内にとどまり、学びの意味や生活・社会とのつながりが十分に明確にならないという課題も残った。

以上のことから、音楽科の授業においては、次の点が重要であると考える。

- 音楽的な見方・考え方を働かせ、協働的に音楽の意味や価値を創り出すこと
- 中核となる概念や方略に基づく題材を通して習得した知識・技能を活用し、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会に関わる「新たな文脈の課題」から音楽の意味や価値を創り出すこと

これらを通じて、子どもたちが生活や社会の中で音楽とより一層豊かに関わることができるようになると考える。そこで本研究では、「音楽と豊かに関わることができる生徒を育成する音楽科の授業～音楽の意味や価値を創り出させることを通して～」を研究主題として設定し、実践を進めていくこととした。

Ⅱ　研究の概要

１　音楽科の目指す生徒像

音楽と豊かに関わることができる生徒

「音楽と豊かに関わることができる生徒」とは、音楽を通して、自ら意味や価値を創り出しながら、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と関わることを指す。

２　育みたい資質・能力

音楽科が目指す生徒像に近づくために、次の資質・能力を育む必要がある。

- 「表現のめあて」を決定する力
- 習得した知識・技能を活用する力

「『表現のめあて』を決定する力」とは、音楽的な見方・考え方を働かせ、協働しながら、鑑賞で捉えたことを基に、自分の思いを表現するために音楽を形づくっている要素の働きをどのように工夫すればよいかを、分析・構想・省察[注10] しながら、表現方法を決定する力のことを指す。

「習得した知識・技能を活用する力」とは、音楽的な見方・考え方を働かせ、題材を通して習得

した知識・技能を、生活や社会と関わりのある身近な音楽に対して活用する力のことを指す。習得した概念や「一般化された知識」を活用し、生活や社会と関わりのある身近な作品から音楽の意味や価値を創り出す中で、概念的思考力が育まれる。

これらの資質・能力を育んでいくことで、音楽的な見方・考え方を働かせ、自ら音楽の意味や価値を創り出し、より深く生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と関わることができるようになり、音楽科が目指す生徒像に近づくことができると考える。

３　資質・能力を育むための手立て

総論において示されている、各教科で設定した資質・能力を育むための手立てにおける「中核となる概念」「一般化された知識」「概念」「事実」について、本校音楽科では表１の通り定義する。また、一題材を例にした知識の階層図を、後掲資料１に示す。

知　　識	説　　明
中核となる概念	各題材で中心に取り扱う音楽を形づくっている要素 （「音色」「リズム」「速度」「旋律」「テクスチュア」「強弱」「形式」「構成」など）
一般化された知識	概念同士の関わりを明文化したもの
概念	事実から見いだされる音楽を形づくっている要素の働き
事実	「概念」を具体化した知識

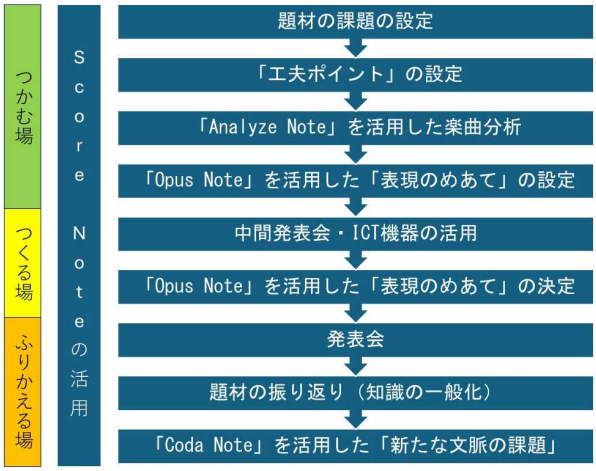
【表１　各知識の説明】

その上で、資質・能力を育むために、題材を「つかむ場」「つくる場」「ふりかえる場」の三つの場で構成し、題材を展開させる（図１）。

「つかむ場」では、題材の課題と「工夫ポイント」の設定を行い、学習の見通しを立てた上で、まず「Analyse Note」（後掲資料２）を活用した楽曲分析に取り組ませる。終末では、「Opus Note」（後掲資料３）を用いて、「表現のめあて」の設定をする。

「つくる場」では、グループで音楽表現を工夫させる。グループでの意見交流や中間発表会を通して、より良い音楽表現を創り上げるとともに、自分の設定した「表現のめあて」がより明確なものとなるよう、学習を進める。終末では、最終的な「表現のめあて」を「Opus Note」に記述させることで、自身の思いや意図を明確にさせ、音楽の意味を創り出させる。

「ふりかえる場」では、最終の発表会を行い、題材の振り返りと知識の一般化をさせた後に、「Coda Note」（後掲資料４）を活用し、「新たな文脈の課題」に取り組ませる。



【図１　三つの場で構成された題材の展開】

このような題材の展開の中で、資質・能力を育むために、次のような手立てを講じる。

(1)「『表現のめあて』を決定する力」を育むための手立て

ア　「Score Note」（後掲資料５）を活用した振り返り

題材を通して、題材の課題及び毎時間の目標、「工夫ポイント」、方略、評価基準をまと

めた学習プリント「Score Note」を活用し、「Score Note」に毎時間の学習目標に沿った振り返りを記述させる。

題材全体を通して追究する「題材の課題」の設定にあたっては、特に着目する音楽を形づくっている要素を明示するとともに、既得知識や経験を振り返らせる。これらにより、生徒が「何を学ぶのか」を見通しながら学習に取り組めるようにする。

また、題材で扱う音楽を形づくっている要素を、具体的にどのように工夫させるのかについて、「工夫ポイント」として示すことで、工夫する視点を明確にもち、より良い音楽表現の実現に向けて学習を進められるようにする。

なお、振り返りに対しては、フィードバックし、形成的評価を示すことにより、学習の見通しをもたせ、ねらいに沿って主体的に学習を進めさせる。

イ　「Analyse Note」を活用した楽曲分析と、習得した概念をもとにした「表現のめあて」の設定

「つかむ場」の楽曲分析においては、「Analyse Note」を活用する。「Analyse Note」では、「工夫ポイント」として挙げた音楽を形づくっている要素の働きと場面ごとの曲想との関係性について分析することで、概念の習得を図る。また、「つかむ場」の終末では、同じく「Analyse Note」に音楽を形づくっている要素の働きの関わりについてもまとめさせることで、「表現のめあて」の設定や知識の一般化につなげていく。

その後、習得した概念を基に、この時点での「表現のめあて」を「Opus Note」に記述させることで、「つくる場」における表現活動の見通しをもたせる。

ウ　グループでの意見交流と発表会

「つくる場」において、グループで表現を工夫する活動を行う。グループでの意見交流を通して、より良い音楽表現を創り上げるとともに、自分の設定した「表現のめあて」がより明確なものとなるよう、学習を進める。

また、発表会を行うことで、互いの演奏や作品を鑑賞し合い、音楽を形づくっている要素の働きに着目しながら、それぞれの音楽表現に込められた思いや意図を捉えさせ、音楽の多様な意味や価値を創り出させる。互いの表現について、音楽を形づくっている要素の働きが生かされた音楽表現であるか、より良い音楽表現はないか意見交換させる他、ICT機器を活用して音楽表現を録音し、客観的に聴かせることで、多様な音楽表現の仕方に気付かせたり、自らの音楽表現を振り返らせたりする。

これらの活動を通して音楽表現を創意工夫する中で習得した概念を生かしながら、最終的な「表現のめあて」を決定させることで、自身の思いや意図を明確にさせ、音楽の意味を創り出すよう促す。

(2)「習得した知識・技能を活用する力」を育むための手立て

ア　「Score Note」を活用した知識の一般化

「ふりかえる場」で行う知識の一般化に際しては、「一般化された知識」を「Score Note」にまとめさせることとする。これにより、題材の課題や「工夫ポイント」を再確認したり、題材におけるそれぞれの授業の活動や学びを振り返ったりしながら一般化させることにより、題材を通して習得した知識をより適切に一般化できるように促す。

イ　「一般化された知識」を活用して取り組む生活や社会に関わる「新たな文脈の課題」の設定

「ふりかえる場」の終末において、生徒にとって生活や社会と関わりのある身近な作品を取り上げた鑑賞課題を「新たな文脈の課題」として設定し、「Coda Note」に音楽の意味や価値について記述させる。なお、鑑賞課題に取り上げる作品については、題材において中心に取り扱ってきた音楽を形づくっている要素の働きが特徴的なものとする。「新たな文脈の課題」に取り組む中で、習得した概念や「一般化された知識」を活用させ、音楽の意味や価値を創り出させる。

４　資質・能力が育まれたかの評価について

資質・能力が育まれたかについて、「Opus Note」の記述及び音楽表現、「Coda Note」の記述から評価し、手立ての有効性を検証する。

また、学級全体の変容を捉えるための補助的資料として、抽出生徒を設定し、上記の分析方法に加え、授業の様子からも見取りをすることで検証の一助とする。

５　研究の経緯と課題

研究１年次では、「『表現のめあて』を決定する力」と「習得した知識・技能を活用する力」を育むために設定した手立てが有効であるかを検証し、教科理論の構築を図った。

「『表現のめあて』を決定する力」を育むために、「Score Note」を活用し、毎時間、学習目標に沿って振り返りを記述させ、形成的評価を示したことで、題材の「工夫ポイント」を活用して「表現のめあて」を決定する姿が見られた。以上のことから、学習のねらいに沿って学習を進めさせることができたと考える。また、「中間発表会」で「工夫ポイント」を視点に、お互いの表現に対して意見交流を行ったことで、級友の意見を参考にしながら、より明確な「表現のめあて」を決定する姿が見られた。以上のことから、多様な音楽表現の仕方に気付かせたり、自らの音楽表現を振り返らせたりする上で有効であったと考える。

一方、知識を一般化する場面において、題材全体の振り返りを記述させたことで、題材全体の学びを整理させることができたものの、「一般化された知識」である「題材における概念としての知識の関わりを明文化したもの」[注11)]に対して、概念としての知識となる音楽を形づくっている要素の関わりについて、指導側の意識が薄かったため、要素間の働きの関わりまで捉えさせることが不十分であった。そのため、題材全体を通して、音楽を形づくっている要素の働きの関わりに着目させ、学習を進めさせていくとともに題材全体の振り返りの方法を見直す必要があると考える。

「習得した知識・技能を活用する力」を育むために、「ふりかえる場」の終末において、生徒にとって生活や社会と関わりのある身近な作品を取り上げた鑑賞課題を新たに設定し、「Coda Note」に音楽の意味や価値について記述させた。その結果、身近な作品に対して題材において中心に取り扱ってきた音楽を形づくっている要素の働きに着目して、自分なりに音楽の意味や価値を創り出すことができた姿が見られたことから、一定の成果が得られたと考える。一方で、上で述べた通り、知識を一般化する段階において、音楽を形づくっている要素の関わりまで捉えさせることが不十分であったため、要素間の働きの関わりに言及させ、音楽の意味や価値を創り出させる点に課題が残った。今後は、知識を適切に一般化させた上で、習得した知識・技能を活用できるようにする必要があると考える。

６　２年次のねらい

２年次は、音楽を形づくっている要素の働きの関わりに着目させ学習を進めさせていくとともに、題材の振り返りの際に、音楽を形づくっている要素の働きの関わりについても振り返らせるように

することで、適切に「一般化された知識」を形成させる。そして、その知識を活用して、音楽の意味や価値を創り出すことができるようにさせることで、音楽科の目指す生徒像の実現を図っていく。

手立ての有効性については、引き続きワークシートや音楽表現、授業の様子から見取ることで検証していく。

注1) 「知性」とは、物事を考えたり判断したりする力のことを指し、「感性」とは、物事を心に感じ取る力のことを指す。

注2) 「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などと関連づけること」を指す。

注3) 本校音楽科では、「意味」とは、表現者が込めた思いや意図を指し、「価値」とは、受け手が受け取るよさや美しさのことを指すと捉えている。末永幸歩は、高階秀爾の論考「美しさの発見」を引用しながら、「美しさというものが、そのものの中に内在しているものではなく、その美しさを発見する人の心に灯るものである」と述べている。したがって、「意味」として込められた思いや意図が、よさや美しさとして「価値」あるものと捉えられるかどうかは、受け手側に委ねられると考える。

注4) 中核となる概念に基づいて、題材全体の学習をどのような順序・方法で構成するかという学習の進め方のことを指す。本校音楽科では、中核となる概念である、各題材で中心に取り扱う音楽を形づくっている要素に基づき、「つかむ場」（鑑賞曲の分析）、「つくる場」（音楽表現の構想・省察）、「ふりかえる場」（学習の振り返り・知識の一般化・意味や価値の創造）の学習で構成し、それをScore Noteに示す。

注5) 多様な教材や音楽表現方法を提示して選択させることで、自らの学習を調整しながら粘り強く取り組ませたり、自らの学習が最適となるようにさせたりしていく学びのことを指す。

注6) 知覚・感受したことを共有し共感したり、考えを交流したりすることで、様々な捉え方や考え方を生かしたより良い音楽表現を創意工夫していく学びのことを指す。

注7) 「扱っている題材を工夫して表現するにあたり、自己の思いや意図を実現させるために、音楽を形づくっている要素をどのように働かせるかという具体的な方法を文章で書き表したもの」を指す。

注8) 本校音楽科では、「音や音楽に対する思いや意図といった音楽の意味を創り出したり、音や音楽のよさや美しさといった音楽の価値を創り出したりすること」と定義する。

注9) 題材で扱う音楽を形づくっている要素を、具体的にどのように工夫させるのかについて示したものを「工夫ポイント」と称し、生徒に提示することで、工夫する視点を明確にもち、より良い音楽表現の実現に向けて学習を進められるようにする。

注10) 具体的には、知覚・感受したことを基に、曲想を感じ取り分析を行うこと、イメージをどうすれば表現できるのか全体の構想に目を向けること、自分のイメージが伝わる表現になっているか省察をすることなどが考えられる。

注11) 「一般化された知識」について、１年次では「題材における概念としての知識の関わりを明文化したもの」と定義していたが、２年次より変更している。

引用文献

1) 文化庁（2023）：文化芸術充実・改善に向けた検討会議（第1回）、5ページ

2) 文化庁（2023）：文化芸術充実・改善に向けた検討会議（審議のまとめ）、11ページ

3) クリストファー・スモール『ミュージッキング　音楽は〈行為〉である』水声社、2011年、29ページ

4) 文化庁（2023）：文化芸術充実・改善に向けた検討会議（審議のまとめ）、18ページ

5) 文化庁（2023）：文化芸術充実・改善に向けた検討会議（審議のまとめ）、18ページ

参考文献

日本音楽教育学会『音楽科教育研究ハンドブック』教育芸術社、2019年

長谷川諒『音楽科教育はなぜ存在しなければならないのか 「良い音楽科教育」を構想するための目的論』明治図書、2024年

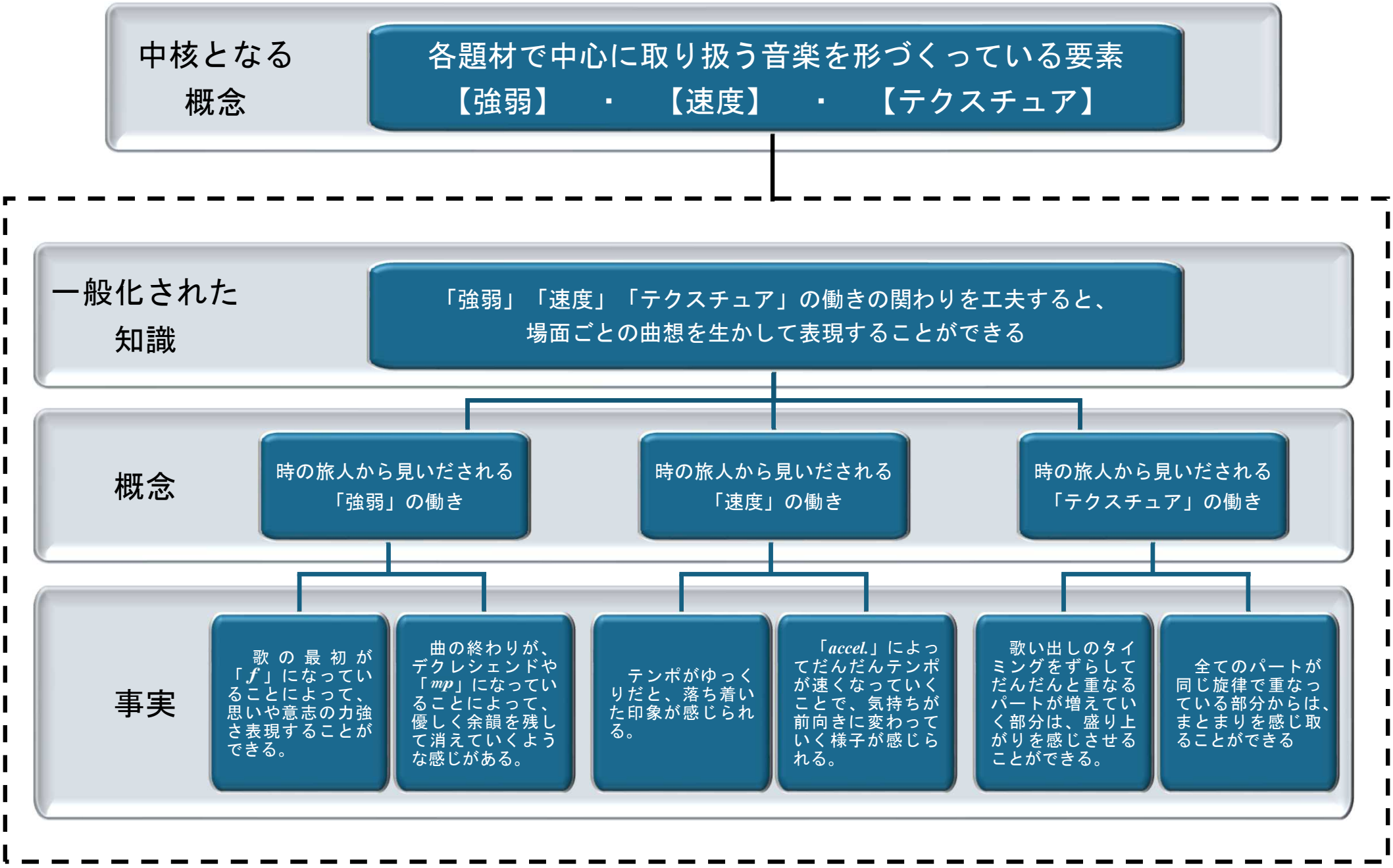
久保田慶一『14歳からの新しい音楽入門 〜どうして私たちには音楽が必要なのか』スタイルノート、2021年

高階秀爾『日本人にとって美しさとは何か』筑摩書房、2015年

日本学校音楽教育実践学会『音楽的思考を育てる資質・能力スタンダード:主体的な学びを支える授業の理論と実践』図書文化社、2024年
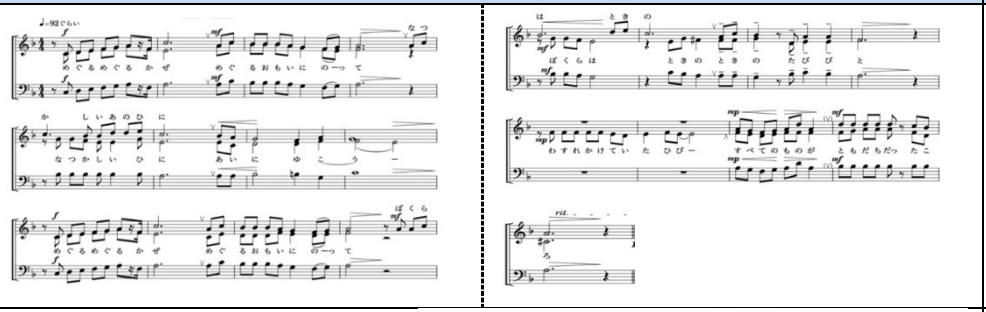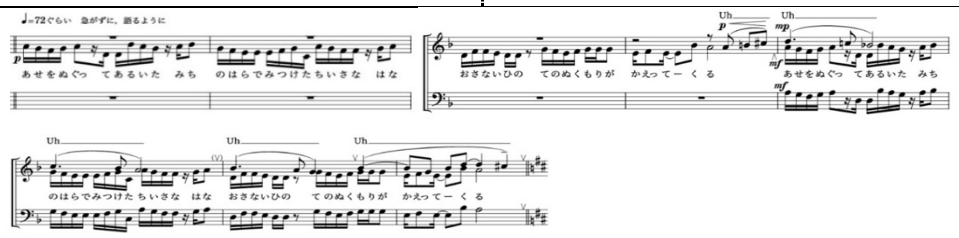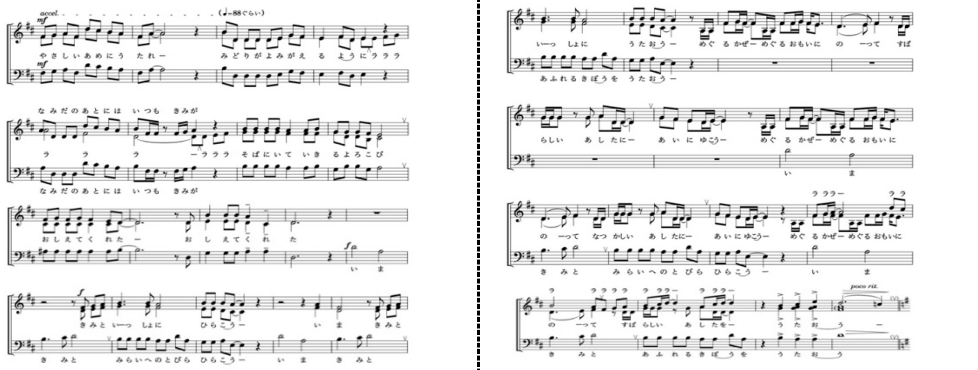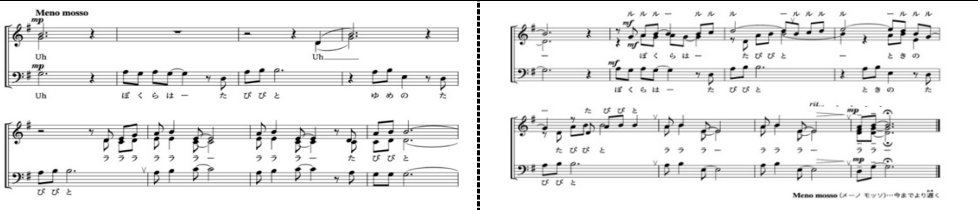
後掲資料１

題材「巡りゆく響き　～時の旅人～」における知識の階層図



後掲資料２ **Analyse Note** (アナリーゼノート)　「時の旅人」　深田じゅんこ　作詞／橋本祥路　作曲
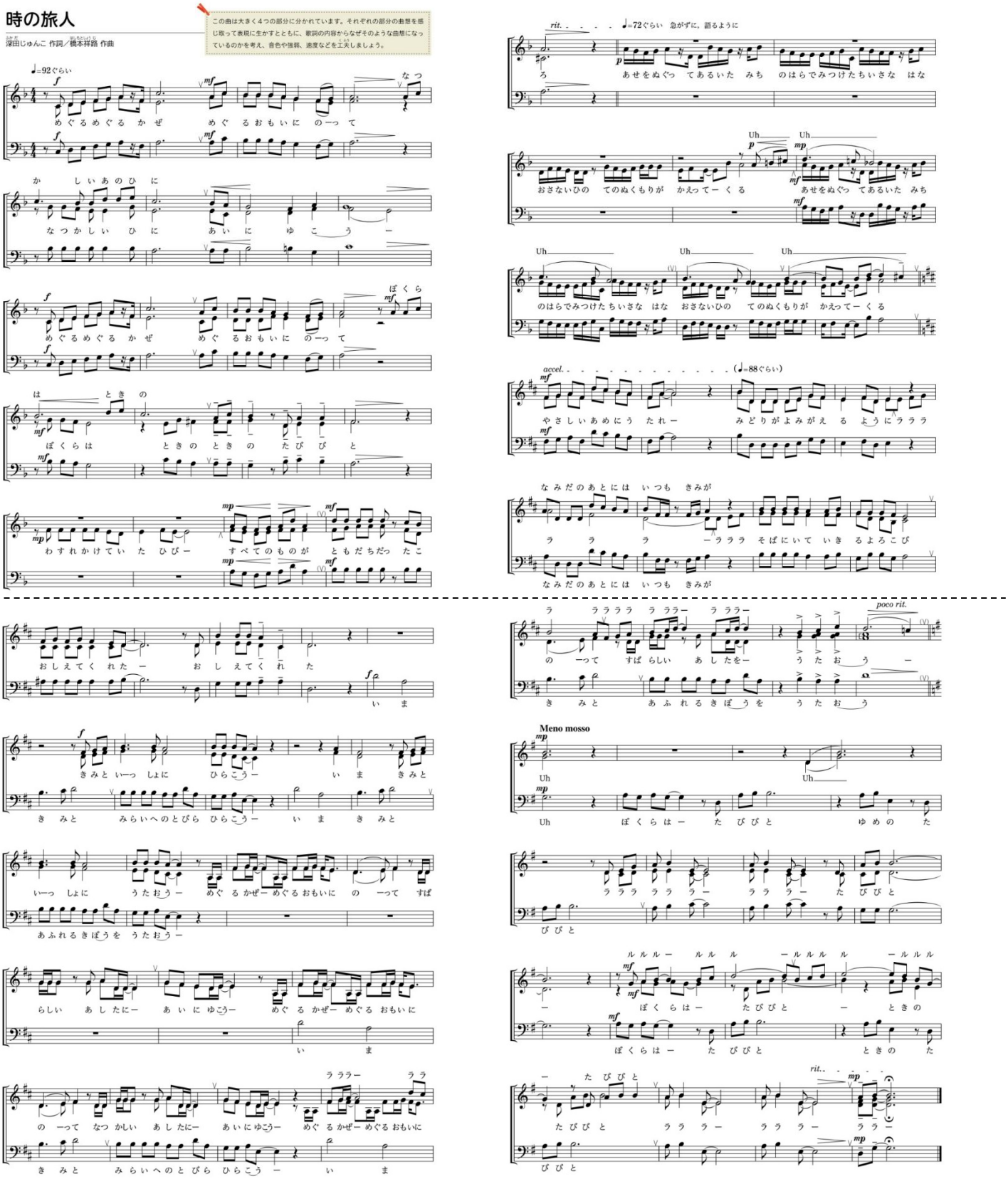
○「強弱」「速度」「テクスチュア」の働きと曲想との関わりについて、表にまとめましょう。

場面	楽　譜	強　弱	速　度	テクスチュア	曲　想
A					
B					
C					
D					

○　『時の旅人』の「強弱」「速度」「テクスチュア」の働きと曲想の変化との関わりについて、わかったことを具体的にまとめましょう。

【評価】知・技（　A　・　B　・　C　）

後掲資料３ Opus Note （オーパスノート）



【表現のめあて】※「強弱」「速度」「テクスチュア」の働きと曲想の変化との関わりに触れて、どのように音楽表現するか、記述しましょう。

「表現のめあて」設定

「表現のめあて」決定

【評価】思・判・表（ A ・ B ・ C ）

後掲資料４

Coda Note (コーダノート)

「走る川」　作詞：金沢智恵子　　作曲：黒沢吉徳

A

岩をかみ　しぶきを上げ　魚(うお)を押し
風をさき　ふり返らず　水は　走る
もどれない　命を
いっしんに　走る　走る

B

こんなにも　急いで
水は　一途(いちず)に　下ってゆく
滝を落下し　すべり　削り
渦巻く　早瀬となる

C

月のない夜も　凍れる冬も
あらゆる阻みに　出会っても
不屈の決意で　水は　走りつづける

D

やがて　大地は広がる
光はふりそそぐ
花の色に香りに　染まって
ゆったりと　あたたまってゆく
旅の終わりの予感を　たずさえて

○「強弱」「速度」「テクスチュア」と曲想との関わりについて感じ取りましょう。
※　歌詞に込められた思いも見ながら考えてみよう。

強弱	速度	テクスチュア
要素同士のかかわり		

○「走る川」の意味や価値について、記述しましょう。
※　「強弱」「速度」「テクスチュア」に着目し、一般化した知識を活用してまとめること

後掲資料５ **Score Note**（スコアノート）　「時の旅人」　深田じゅんこ　作詞／橋本祥路　作曲

題　　材	巡りゆく響き　～時の旅人～
課　　題	「強弱」「速度」「テクスチュア」の働きをどのように工夫すれば、場面ごとの曲想を生かした表現ができるか。
工夫ポイント	強　弱　「強弱」を工夫して、曲想の変化をもたせること　速　度　場面に合わせて、「速度」を変化すること　テクスチュア　音の重なりの違いを生かして表現すること

場	時	日	学習活動	本時の目標	本時の目標に対する振り返り　※【評価】主体的に学習に取り組む態度
つかむ	1	／	・楽曲分析（場面 AB） ・パート練習	「強弱」「速度」「テクスチュア」の働きと曲想との関わりについて捉えよう	
つかむ	2	／	・楽曲分析（場面 CD） ・パート練習	「強弱」「速度」「テクスチュア」の働きと曲想との関わりについて捉えよう	
つくる	3	／	・「表現のめあて」設定 ・パート練習	「強弱」「速度」「テクスチュア」の働きを工夫して歌おう①	
つくる	4	／	・パート練習 ・グループ練習	「強弱」「速度」「テクスチュア」の働きを工夫して歌おう②	
つくる	5	／	・中間発表会	意見交流して、表現を見直そう	
つくる	6	／	・「表現のめあて」決定	「表現のめあて」を決定しよう	
ふりかえる	7	／	・発表会 ・題材の振り返り	題材の学びを振り返ろう	強　弱 速　度 テクスチュア 《　一般化された知識　》 要素どうしの関わり
ふりかえる	8	／	・新たな文脈の課題	「一般化された知識」を活用して、音楽の意味や価値について考えよう	

観　点	評価基準	評価物	評　価	総合評価
知識・技能	「強弱」「速度」「テクスチュア」の働きと曲想との関わりについて理解している。	Analyze Note	A・B+・B・B-・C	A ・ B ・ C
	「強弱」「速度」「テクスチュア」の働きを生かして、演奏している。	演奏	A・B+・B・B-・C	
思考・判断・表現	「強弱」「速度」「テクスチュア」の働きと曲想との関わりについて理解したことを基に、どのように音楽表現するかについて考え、思いや意図をもっている。	Opus Note	A・B+・B・B-・C	A ・ B ・ C
主体的に学習に取り組む態度	「強弱」「速度」「テクスチュア」の働かせ方の多様性に関心をもち、試行錯誤しながら取り組んでいる。	授業全体の様子 Score Note	A・B+・B・B-・C	A ・ B ・ C
	「強弱」「速度」「テクスチュア」の働かせ方の多様性に関心をもち、振り返りながら取り組んでいる。		A・B+・B・B-・C	
	「強弱」「速度」「テクスチュア」の働かせ方の多様性に関心をもち、他者と協働しながら取り組んでいる。		A・B+・B・B-・C	